

「嗣業の土地として分けなさい」

副牧師：松坂 政広

<ヨシュア記 13章1節~7節 新共同訳>

「 - 各部族の領地 -

- ¹ヨシュアが多くの日を重ねて老人となったとき、主は彼にこう言われた。
「あなたは年を重ねて、老人となったが、占領すべき土地はまだたくさん残っている。
- ²残っている土地は次のとおりである。ペリシテ人の全地域とゲシュル人の全域、
³エジプトの東境のシホルから、北はカナン人のものと見なされているエクロンの境まで。ここには五人のペリシテ人の領主の治めるガザ、アシュドド、アシュケロン、ガト、エクロンの人々があり、アビム人の領土が
⁴その南にある。またカナン人の土地全域、シドン人のメアラ、アモリ人国境アフェカ、
⁵更にゲバル人の土地、ヘルモン山のふもとバアル・ガドからレポ・ハマトに至るレバノン山東部全域、
⁶およびレバノン山からミスレフォト・マイムに至る山地の全住民、すべてのシドン人。わたしは、イスラエルの人々のために、彼らすべてを追い払う。あなたはただ、わたしの命じたとおり、それをイスラエルの嗣業の土地として分けなさい。
- ⁷この土地を九つの部族とマナセの半部族に嗣業の土地として配分しなさい。ヨルダン川から西の海まで、海沿いの地域をこれに与えなさい。」

<メッセージ>

「この民を導き入れるのはあなただ（申命記31:7）。」

モーセを通して主はヨシュアにそうお語りになりました。約束の地に同胞を導くために、ヨシュアに、主が使命を与えられました。

それは、主が命じられたとおりに、ということであり、それは、年を重ねてきたヨシュアにもなお占領すべき土地がたくさん残っているということであり、それは、嗣業の土地、相続地として分ける、割り当てるということでした。

ただ、6節の「ただ、わたしの命じたとおり」主が命じたとおり、の「命じた」

は、繰り返し、必ずそうするように、という表現になっていて、しかも必ずそうなる、という表現になっていますので、これは、命じられた側からしても、命じた側からしても、確実に履行されるということですね。

① 「占領すべき土地はまだたくさん残っている」

イスラエルの12部族がそれぞれ相続地を割り当てられる、その前に、主がその土地を確保されるということがあって、年老いたヨシュアには、その使命が託されていました。占領すべき土地はまだたくさん残っている。ただし、このことを実現されるのは、主であって、主が、わたしが彼らを追い払う。とおっしゃいました。追い払うと訳されていることばは、だれだれに所有させる、ということばです。約束の地をイスラエルの民に受け継がせる、と言っていることになります。このことが詳細に記されているのが、ヨシュア記ですね。今は、だれだれの地になっていたとしても、すべてを支配しておられるお方が定められたとおりに、約束の地としてそれは、イスラエルの民に受け継がせると言っているのですね。

② 「嗣業の土地、相続地として分ける、割り当てる」

主が、ご自身の民に嗣業の土地として、約束の地を割り当てさせるのに、くじが用いられました。相続地として分ける、割り当てるのにです。

聖書には、しばしばくじが出てきます。旧約聖書だけでも77回出てきます。そのうち、数えてみましたら、26回ヨシュア記に出てきますので、ヨシュア記は、くじの宝庫ということになります。箴言(16:33)に、くじは膝に投げられるが、そのすべての決定は主から来る。とありますように、聖書では、くじは、すべてを支配しておられる主のみこころを表わすものと考えられていました。おそらく聖書で最もくじで有名な箇所と支持されるでしょうヨナがくじに当たって、海に投げ込まれるという、一見、だれのせいでこうなったかを決めるときの手段のように描かれているくじは、実は、海の波がヨナを過ぎ越して行って、神が用意された魚の中で彼は、神の救いを感謝して祈ったのであって、それは、恵みでしかなかったわけですが、ここでも、神の約束どおり、イスラエルの12部族に主が約束の地を相続地として割り当ててくださる恵みの手段としてくじが用いられました。

わたしたちにとって何を意味するか？

今日(こんにち)、わたしたちは、聖書の時代のように、くじを引くことで、神のみこころを知ろうとはしないでしょう。むしろ、日常のなかで出会う、与えられるものを通して、神に祈り、感謝します。聖書では、くじを引くことは、御心が成就することに意味がありました。わたしたちにとって、意味があるのは、主が言われたとおりに、ということになります。

①主が言われたとおりを味わう

わたしたちが、ヨシュア記を通して、主が言われたとおりに、を味わうのは、主が言われたとおりにした場合と、主が言われたとおりにしなかった場合が描かれているからですね。

ヨシュア記の6章、7章には、主が言われたことがどれほどの重みがあるかが描かれています。そのひとつは、主が言われた通りにしたら、どうなったかです。城門を固く閉ざしていたエリコの町を、主がイスラエルの民の手に渡されるのに、「見ていなさい。」と言われました。それは、七日間町の周囲を行進するというもので、その計画が滞りなく遂行されると、城壁は崩れ落ちたのでした。主が言われたことがどれほどの重みがあるかが描かれている、そのもうひとつは、主が言われた通りにしなかったら、どうなったかです。「くれぐれも言うておくれが、滅ぼし尽くすべき献げ物に手を出してはならない。」と主から言われていたことに対して、背信の罪を犯したアカンは、同胞を巻き添えにし、自ら蒔いた種を刈り取ることになりました。

②主が言われたとおりに生きる秘訣は？

「主が言われたとおりに」生きることを、わたしたちはみこころに生きると思います。最近思うのですけれど、みこころに生きる、その前提に、み国があることを忘れてはならない。み国の前に、み名があることを忘れてはならない。主の祈りで導かれる世界は、まず、わたしたちが礼拝するお方がどういうお方があって、次にそのお方が支配しておられるみ国があって、そして、次にみこころが成るように祈るよう導かれます。ですから、みこころに生きるうえで、み国に照らして、み名に照らして見ることに秩序があるのではないのでしょうか。

その線にそって考えると、約束の地のことがアブラハムに語られてから730年経ってそのことがヨシュアを通して実現するという。とにかく気の遠くなるようなことは、それだけ神が約束を決して忘れてはいないことの実話長編物語みたいなことです。

神の国の見える形での嗣業の土地というのは、自分で勝ち取ったのではない！ということであって、その上で、主が言われたとおりに、みこころに生きるよう、ご自身の民を、わたしたちを、主は今日も導かれるのですね。